2014 年度
川上村地域づくりインターンシップ報告書

北海道大学環境科学院生物圏科学専攻修士 2 年

野坂恵

2014年度川上村地域づくりインターンシップ
報告書

北海道大学環境科学院生物圏科学専攻修士2年
野坂恵

＜目次＞

１、活動内容について
（ア）　スケジュール
（イ）川上村で体験したこと・感想
（ウ）川上村の特徴（強み）

２、川上村に足りないもの　－「みんなの裏山」の提案－
（ア）「子供が自然の中で遊ばない」という現状と課題
（イ）外遊びができる環境の必要性
（ウ）冒険遊び場「みんなの裏山」の提案
（エ）旧白屋地区を活用した「みんなの裏山」
（オ）まとめ

３、川上村に「あるもの」と「ないもの」
（ア）川上村の「自然&ダム」
（イ）川上村の「吉野林業」
（ウ）川上村の「歴史」
（エ）川上村の「田舎暮らし」
（オ）川上村の「イベント・観光・都市との交流」

４、インターンシップ事業に参加した感想

１、活動内容について

（ア）スケジュール

12	午前	－
	午後	インターン事業概要説明、村長・副村長挨拶
	夜	村づくり塾（大滝ダム対岸道路の活用案）
13	午前	総合計画、川上 ing 作戦について説明
	午後	村内散策（蜻蛉の滝、大滝ダム、大迫ダム、三之公川）
	夜	役場職員との懇親会（中井渓谷自然塾）
14	午前	森と水の源流館見学
	午後	水源地の森探索
	夜	北和田の東部地区盆踊り
15	午前	大滝ダム見学
	午後	東川盆踊り手伝い
16	午前	かみせ祭り手伝い（主に商工会女性部）
	午後	
17	午前	（自由行動）上谷散策、中奥川探索
	午後	
18	午前	箸づくり見学（マルヤ製箸所）
	午後	環境基本計画について説明
	夜	川上村合同ブートキャンプ報告会（1 日目）
19	午前	林業学習、下多古村有林、御船の滝見学
	午後	小学校見学
	夜	川上村合同ブートキャンプ報告会（2 日目）
20	午前	林業学習、伐採体験（玉井さん）
	午後	樽丸づくり見学（春増さん）
	夜	川上村合同ブートキャンプ報告会（3 日目）
21	午前	（自由行動）坂口さんとお話
	午後	保育所、診療所見学、辻谷さんとお話
22	午前	報告書作成
	午後	かわかみんぐツアー　参加
	夜	北和田のお母さんの夕食にお呼ばれ
23	午前	達っちゃんクラブのイベント手伝い
	午後	報告書まとめ
24	午前	報告書まとめ
	午後	
25	午前	報告会

（イ）川上村で体験したこと・感想

12 日

・役場挨拶

「消滅可能性都市」のニュース、「第三者目線で川上村を見た時に足りない点を言ってほしい」という話しを沢山聞き、川上村の焦燥感を肌で感じた。

・村づくり塾

当日もたくさんのアイデアが出たが、そのアイデアを実現させる方法がないことが課題。

13 日

・川上村総合計画・川上 ing 作戦

「水源地の村」という新しいスローガンのもと、新しい村づくりが始まったばかりということが良く分かった。林業についてのビジョンや計画はほとんどなく、残念。

14 日

・環境学習（源流館・水源地の森）

水源地の森に入れず残念。生活の中で活用されてきた植物をたくさん教えていただき、山奥ならではの独自文化があるということを知った。

・北和田盆踊り

初体験の盆踊りだったが、屋台のお手伝い、盆踊りを通して、村の方々が気さくに声をかけて下さり、インターン生一同楽しめた。

15 日

・大滝ダム＆学べる防災ステーション

ダムの内部見学と、学べる防災ステーションで豪雨体験、大滝ダムの歴史とダムの役割について学ぶ。ダム反対派の批判にさらされてきた館長さんの言葉に重みを感じた。

「増水から人を守る今の最善策はダム。他の方法があるならそっちを選択してるよ。」

「ダムのありがたみを下流の人は忘れてしまう。それを食い止めて、上流と下流を繋ぐことが自分の役割」

これが村の覚悟なのだと感じた。

・東川盆踊り

屋台の準備から手伝い、集落の人の手作り夏祭りの面白さを体感した。

16 日

・かみせまつり
　商工会女性部の皆様と一緒にスタッフ弁当つくりと焼きそば屋台を担当。焼きそばは日暮れ前には見事完売し、ちょっとしたお手伝いでも喜んでいただき、嬉しかった。

17 日
・自由行動
　横堀さんの案内で、上谷集落と中奥川を散策。上谷集落の区長さんのコウヤマキ畑、わさび棚、こんにゃく畑を見せていただき、高齢にもかかわらず元気に生活していることに驚いた。中奥川は滞在中の横堀さんの自宅前を流れる川で、生活の身近なところに遊びたくなるような美しい川があることを羨ましく感じた。

18 日
・箸づくり工房見学
　吉野杉の割り箸に付いて、部屋さんの工場に付いて伺う。部屋さんが地道な研究努力の積み重ねで、売上を伸ばしているお話を聞き、田舎であっても商売の工夫しだいで商売できるということを見せつけられた。

・小学校訪問
　子供が自然のなかで遊んでいないという話しを聞き、対策を取る必要があると思った。学年の横が狭い分、縦のつながりが強いという話しを聞き、少人数学校だけの良さもあることを知った。

19 日
・林業学習、歴史の証人見学
　今回のインターンで初めて山登りをしたインターン生が、歴史の証人までの道で完全に疲れ切ってしまった様子を見て、子供のうちから自然に慣れ親しんでいないと、山の中の歩き方すら分からないということを実感した。徐々に自然に慣れる機会がなければ、自然はいつまでも遠い存在のままだと思う。

20 日
・伐採現場見学、伐採体験
　伐採の仕方、伐採木の選定方法、のこぎりを使った伐採方法を教えていただき、林業はまさに技術職で、技術と経験が途切れることの重大さを実感した。また、林業モノレールのありがたみを実感したが、エンジンだけで 400 万円、レール代 1500 円／m という価格に、林業の設備投資の大変さを感じた。

・樽丸づくり見学
　「無地赤身」信仰は時代遅れかもしれない。「節あり黒芯」もおしゃれな製品になるのでは？
　という春増さんの言葉に、吉野林業でも新しい木の使い方を提案する必要があると感じた。

21 日

・やまぶき保育園、診療所訪問
・坂口泰一さん（ダム編算室室長）、辻谷達也さん（達っちゃんクラブ代表）
　川当番のお話を聞き、子供が外で遊ぶ場所をつくるためには、地域の見守りの目が必要だと感じた。

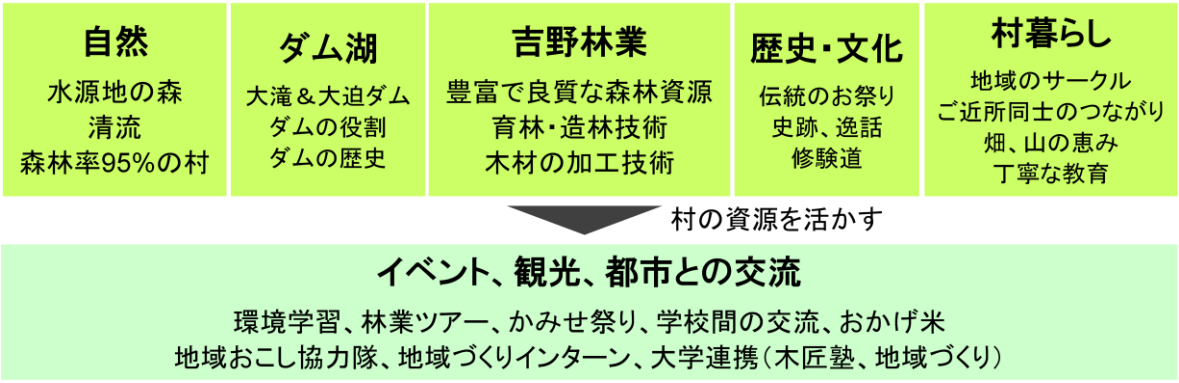
22 日
・旧白屋集落散策
　草地の中に迷路のように道が残っており、子供なら楽しく遊べると感じた。

・かわかみんぐツアー参加（空き家見学）
　空き家をいくつか見せていただいたが、リフォームを覚悟で入る必要があるのではと感じる家もあった。どの程度改装できるのかも示す必要があると思った。

23 日
・達っちゃんクラブのイベント「そうめん流し」手伝い
　村内の若い人の知人の方もスタッフとして参加されており、村内にソトモノのワカモノが村の交流人口を増やしていることを知った。先日、北和田で伺った 1 人暮らしの高齢者のかたは、「協力隊がいてくれて安心して生活できる」と話をしており、色々な側面で村は若者を必要としていることを実感。

24-25 日
・報告書作成、報告会
　インターンシップ中に学んだことを全てまとめる機会をインターン期間中に作ることは必須だと感じた。しかし、インターンで学んだこと、感じたことを全てまとめるには時間が足りなかった。継続的なインターン生と村の係わりを作り、他地域の事例も調べながらレベルの高い提言を行うためには、インターン期間を年 2 回程度に分割するほうがよいかもしれない。

（ウ）川上村の特徴（強み）
　インターンシップを通して、川上村が持つ様々な側面を見せていただいた。その経験を踏まえて、川上村の特徴（強み）をまとめた。



●私の「川上村の印象」

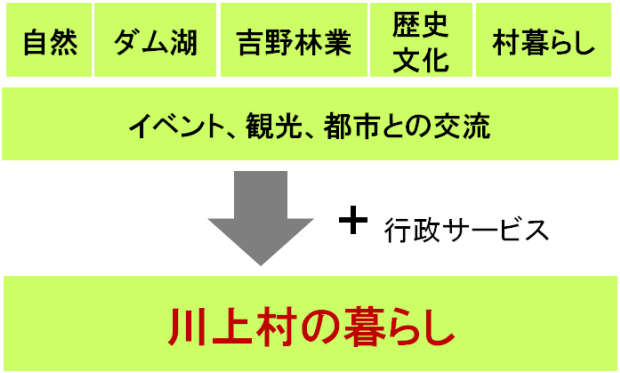
・自然豊かで人も良く、（比較的）暮らしやすい立地

・村内に従業員を求める事業者も多く、働き口はある

・空き家、シェアハウス（来年オープン予定）もあり、住処には困らない

・少人数でも充実した教育環境

→足りないと思った物は、「子供が外遊びをする環境」



●良い点

・自然が身近にある

・林業などの産業があり、働き口がある

・村内の人のつながりが濃い

・空家、村営住宅などがあり住居に困らない

・大都市に近い

・大きめのスーパーまで近い

・少人数で充実した教育

村の方々から聞いた「課題」

・小学校の教頭先生

・やまぶき保育園の保育士さん

・役場職員のかた

・環境教育活動のリーダー

●課題

・子供が自然の中で遊べない！

２、川上村に足りないもの　－「みんなの裏山」の提案－

（ア）「子供が自然の中で遊ばないという現状と課題

インターンシップ中に、川上村の小学校、保育所を含め、5 人の住民の方々から、村の子供がどのような遊びをしているのか伺い、自然が豊かな川上村に住んでいるにもかかわらず、子供が自然の中で遊んでいない、という実態を知った。

私自身もＩターン希望者であるが、田舎に暮らしたい理由の一つが「子供の生活環境」である。緑に囲まれて生活できる川上村でありながら、子供が自然の中で遊べない、遊んでいないという点は、大きなマイナス要素だと感じた。そこで、川上村の子供がなぜ外遊びをしないのか聞き取り調査を行った。

●外遊びの現状（実際に聞いた話）

【保育園児】

・自宅－保育所の間は車での送迎なので、そもそも外に出ない。

・保育所の日常的な活動として、自然の中で遊ぶことが難しい（適地が身近にない）。ダム沿いの遊歩道の草地で遊ばせている程度。

・野外で遊ばせようとしても、怪我を心配する親がいるため、やりにくい。

【小学校、中学校の児童】

・スクールバス通学なので、施設（家や学校）の外に出る機会が少ない。

・校外学習で登山に連れて行っても、歩くだけで疲れてしまい、自由に遊ぼうとしない。

・放課後に学童保育、部活動に行ってしまい、外に出る機会がない。終業後すぐに自宅に帰ってしまう場合は、友達の家が離れているため、家にこもりがち。

・自然の中で遊ぶ経験が親子共に少ないため、野外での遊び方を知らない。遊ぶという発想がない。

●課題　～3 つの間～

①「仲間」がいない

・子供の自宅同士が離れており、子供同士で集まりにくい。

・特に小学生の放課後は、学童保育または自宅で室内遊びをすることが多い。

②「空間」がない

・子供が遊びやすい場がない。

（人家の近くは急斜面が多い、遊びやすい川原は観光客が使ってしまう）

③「時間（機会）」がない

・子供は自然の中で遊ぶ機会がないので、遊び方を知らない。

・親世代も自然の中で遊んだ経験が少なく、遊ばせ方を知らない（遊ばせようとしない）。

（イ）外遊びができる環境の必要性

①川上村の教育の場として必要

・外遊びは、子供の体づくり、集団生活の力、自分で考えて行動する力、生活の知恵を学ぶ場。

・川上村の自然を体で感じ、楽しい子供時代を送ることで、ふるさとに愛着が湧く。関心を持つ。

②移住促進策として必要

・田舎暮らしをする人は、「子供を自然の中で遊ばせたい」と希望する人も多い。

（ウ）冒険遊び場「みんなの裏山」の提案

川上村の住民のためにも、移住者を呼び込むためにも、子供が自然の中で遊ぶ環境は必要なものだと考えられる。そこで、全国で広がっている「冒険遊び場」のコンセプトを踏まえて、新しい外遊びの場を川上村に作ることを提案する。

●冒険遊び場とは

【コンセプト】

・遊び場が、子供の日常生活の中にある　（いつでも遊べる）

・子供が自由に、自立して遊べる　（自由に遊べる）

・仲間同士で遊べる　（誰でも、誰とでも遊べる）

・自然環境が豊か　（自然の中で遊べる）

・子供の手で作り替えができる　（遊び場を創造できる）

【特徴】

・誰でも、いつでも、タダで遊べる

・自然環境の中で遊べる（遊具を設置する場合もある）

・子どもの意思を尊重する（大人は口出ししない）

・管理者、指導者（プレーリーダー）が、大怪我が起きない環境を作る

・行政や住民が連携して、遊び場を作る

・2012 年の時点で全国 311 団体が活動

【事例：みくわ共和国（北海道下川町）】

・「NPO 法人森の生活」が、下川町から管理委託された「美桑が丘」を、住民と一緒に子供の遊び場へ作りあげている。

・美桑が丘は、いつでも、誰でも入って遊べる場。

・基本的には、子供のやることに大人は口出しせず、子供を自由に遊ばせる。

・大きなノコギリ、ナタ等の刃物、火気は大人がいる時だけに限定している（道具類はみくわが丘の倉庫に保管）

・月一回の「みくわの日」は、美桑が丘で遊びたい大人、子供が集まり、好きなことをして遊ぶ

（例：秘密基地、食べ物作り、焚き火、ロケットストーブ、木工、かまくら作り…）

・定期的に開催する「みくわミーティング」で大人が集まり、月一回のみくわの日の運営、美桑が丘の環境整備について相談、決定する。

写真引用： http://morinoseikatsu.org/activity/common/

（以前参加したときのみくわの日の様子（2014 年 1 月））

●冒険遊び場「みんなの裏山」の提案

自然豊かな川上村にも、冒険遊び場のような「誰でも自然の中で遊べる場」が必要だと思う。そこで、生活の身近な所にあり、通年遊ぶことができる山を活用し、**「家の近くの裏山のように、気軽に入って、自由に遊べる山」**を作ることを提案したい。

また、外遊びに不慣れな子供の安全確保、子供の怪我に対する大人の不安感を解消するため、管理責任者と「山当番」を設置したい。また、親と子が自然の中で遊ぶことに徐々に慣れるために、定期的に親子で自然遊びをする機会を作りたい。この時に年配の方々から外遊びの技を教えてもらい、川上村で育まれた生活の技術や知恵の継承も行いたい。

【遊び場のコンセプト】

・裏山のように、誰でも入れる

・裏山のように、自由に遊べる

・裏山のように、遊びの中で自然と触れ合う

・遊びの中で、生きる知恵を学べる
・幅広い年齢の子供が一緒に遊べる

【地域ぐるみで安心して自然遊びができる環境を作る】
①「山当番」を置く
・子どもが遊ぶ時間は、ボランティア（またはアルバイト）の「当番」に来てもらう
・「火、大きな刃物（ナタなど）の使用は当番がいるときだけ」という制限を作る

②管理責任者を置く
・子供のための遊び場を確保するために、子どもの 代弁者として外部との交渉にあたる。

③子どもと親に「外遊びの基本」を教える機会を作る
・道具の扱いかた、自然の中の知恵を教える集まりを、週１回程度開催。
・「安全に遊べる子」と「外遊びに理解のある親」を育てる

（エ）旧白屋地区を活用した「みんなの裏山」

冒険遊び場は、子供が利用しやすい場所にあり、自然遊びに不慣れな子でも安全に遊べる場である必要がある。そこで、現在は空き地となっている旧白屋地区を、冒険遊び場として活用することを提案したい。

●旧白屋地区の現状
・大滝ダムの試験冠水により発生した地滑りで移転した白屋集落の跡地は、
・国有地となり、地滑り対策工事を終え、建物はすべて無くなり、鎮守の森、石段、道路のみが残っている。
・新規に東屋、休憩所、駐車場が整備されている。地区全体は鹿柵で囲われている。
・企業・団体との協働による水源地の村『未来への風景づくり』計画が進行中。

※『未来への風景づくり』計画とは？
・企業に出資を募り、景観林（シンボルツリー、花の美しい木、多様な生物をはぐくむ森）を作る。
・企業社員と家族が実際に作業をするか、村のシルバー人材センターなどに作業を委託する。
・窓口は「公益財団法人　吉野川紀の川源流物語」

（2014 年 8 月 22 日）

⇒提案「旧白屋地区の１区画を、みんなの裏山として一般に開放する。」

●旧白屋地区を活用するメリット

①国道沿いにあり、スクールバスで移動できる（放課後の利用が容易、保育園の近く）

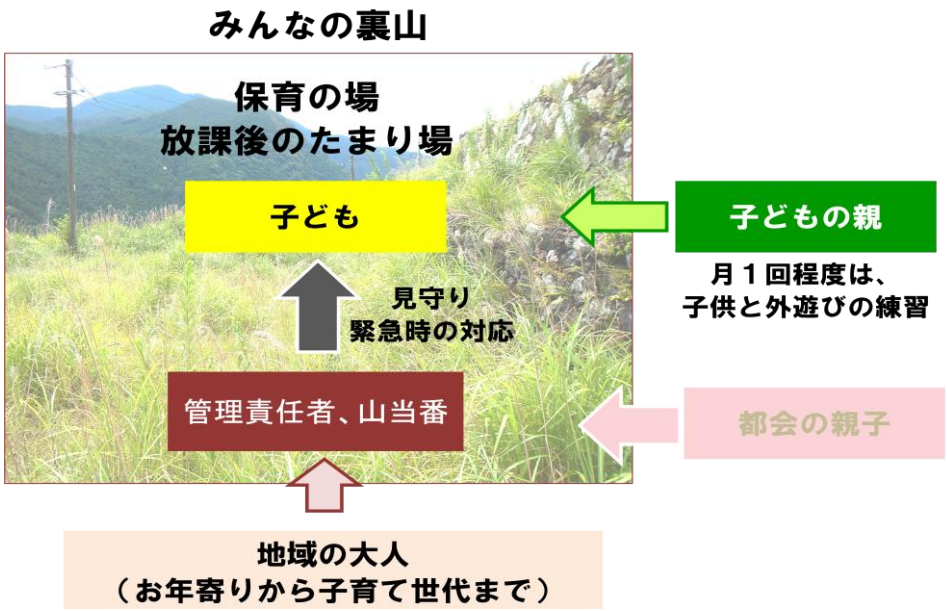
②斜面の傾斜が緩く、遊びやすい

③企業の協力を得られれば、資金の確保や、都市の子どもとの交流ができる

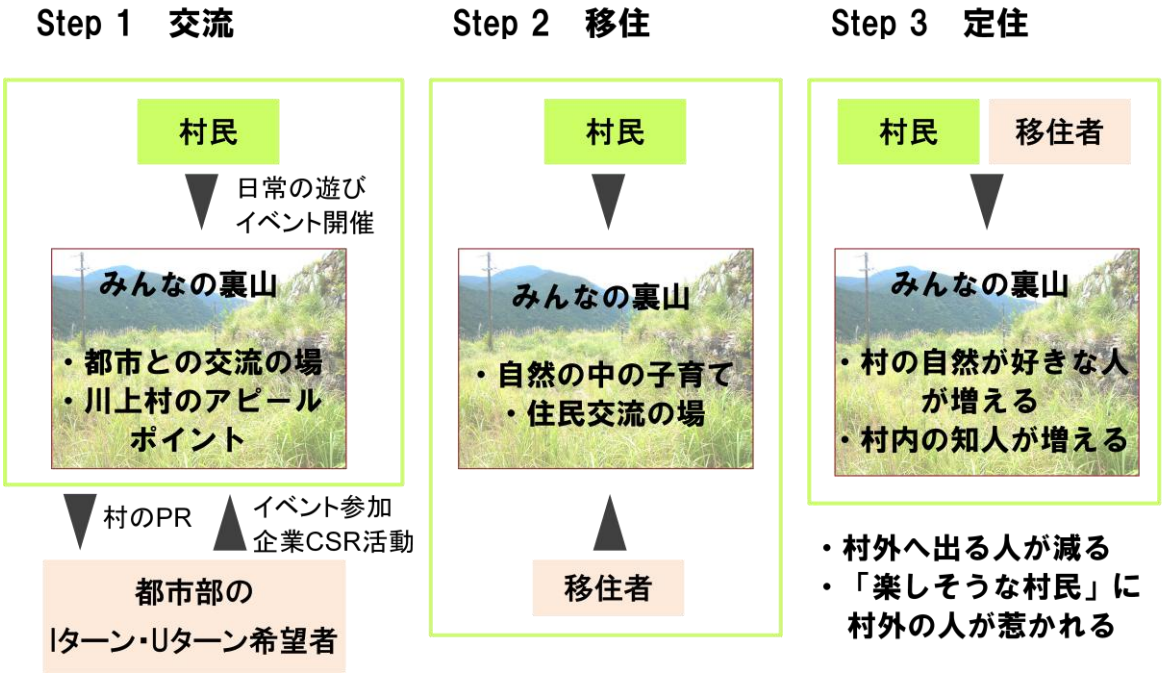
（旧白屋地区の周辺地図）

（オ）まとめ

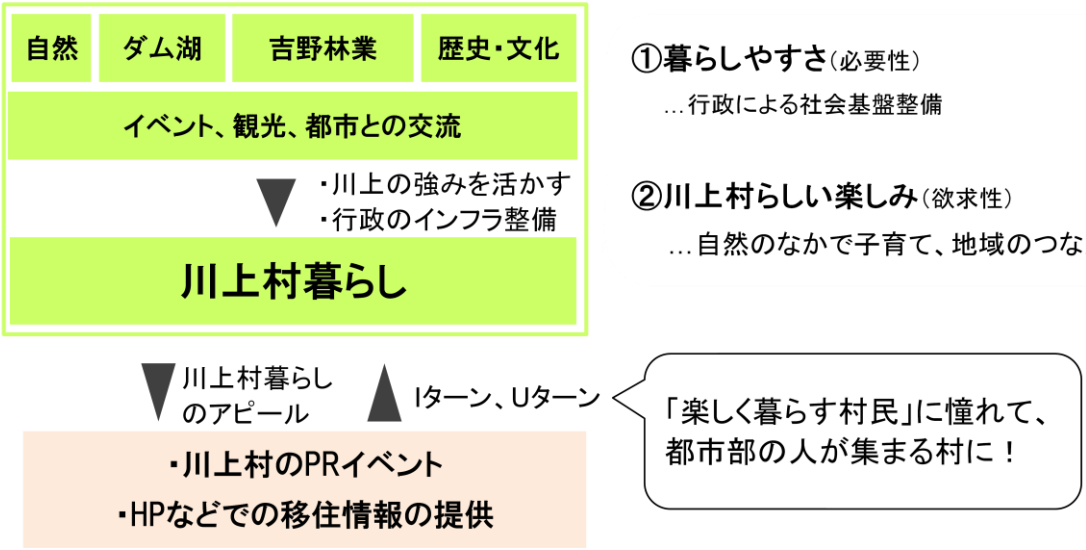
●「みんなの裏山」のイメージ



●「みんなの裏山」づくりから始まる「川上の強みを活かした、住みよい村づくり」



●IターンUターン希望者が惹かれる村とは？



●質疑応答

質問：遊び場までのこともの移動手段はどうしようと考えていますか？

解答：コミュニティバス、スクールバスの運行経路や時間を変更して対応できないかと考えています。

質問：地域づくりインターンシップと、企業インターンシップの両方を比較してどう思いますか？

解答：どちらも目的意識がないと、ただの体験に終わってしまう点が共通。地域づくりインターンシップの場合は、自分が村から何を求められているのか、分かりにくかった。

３、川上村に「あるもの」と「ないもの」

（ア）川上村の「自然&ダム」

●あるもの

（自然環境）

・森や川といった自然の中で生活ができる。

・特に源流部の天然林には多様な生物が見られ、学術的な価値が高い自然を持っている。

・集落の横を流れる数々の吉野川支流の水が美しく、気軽に水遊びができる。

・豊かな自然を活用してきた歴史と知恵の蓄積があり、山での生活技術を学べる場がある。

・村内の山だけでなく、大台ケ原・大峯奥駈道など、登山道が整備されている山が身近な所に多く、気軽に登山が楽しめる。

・鹿、サルによる食害

（地域の活動）

・環境学習の場として開放し、都市部の人と村の自然が交流できる場を作っている。

・「源流の村」として、森林保全、水質保全事業（浄化槽設置など）に行政が積極的に取り組んでいる。

●ないもの

・村の子供が山に入る機会が少ない（自然の面白さ、山での生活技術や知恵を伝承できない）

・外部から来るキャンプ＆バーベキュー客のマナー（放置ゴミの問題）

・民有林の管理、利用について、行政が口出しできない（管理放棄された私有林の整備ができない。皆伐して裸地のまま放置することへの規制ができない）

（イ）川上村の「吉野林業」

●あるもの

・「三大人工美林」と言われる吉野林業の長い歴史

・特徴的な材質（見た目（色、節なし、木目）、性質（強度、狂いの少なさ、真っすぐな木目）、香り）を持つスギ、ヒノキの山

・歴史的な木工製品（割り箸、樽丸）を作る技術、人

・川上の山を守ってきた山守と組合

●ないもの

・村内の人工林のほとんどを所有する 5 大林業家に、「川上の村の人のためになるように」山を動かしてくれるように働きかける方法

・ヘリに代わる出材方法

・木材の販売単価を上げるための製品、販路と、それを開発する担い手

・林業に携わる後継者

・「吉野林業で頑張ろう！」と引っ張っていくバカモノ（民間ではたらいている人）

（ウ）川上村の「歴史」

●あるもの
・縄文時代からの遺跡、逸話、生活の知恵
・後南朝時代の政権争いに関する、逸話、神社
・古くから使い続けられてきた修験道

●ないもの
・川上村の歴史を分かりやすく紹介する場（パンフレット、紹介施設）
・村内の修験道の PR
・多くの住民が村の歴史を知らない。

（エ）川上村の「田舎暮らし」
●あるもの
（村の中のつながり、暮らし）
・都会にはない親密な近所づきあい（生活の楽しみ、安心感が増す）
・保育所～小学校～中学校の間で生徒の交流、年齢の違う子供同士の関係。
（村の中と外のつながり）
・村外の学生との交流が盛ん、村の人が村外の人と接する機会が多い。
・村の方が外部から来た学生に対して親切（訪問したヨソの学生は居心地がよい）

●ないもの
（過疎）
・住民の減少と高齢化によって、住民自治が難しい。
（教育）
・子供の数自体が少ないため、集団での遊び、活動（部活動など）が少ない
（村づくり）
・村づくり塾で出たアイデアを実現する方法

（オ）川上村の「イベント・観光・都市との交流」
●あるもの
・全国の学生（元学生）とのつながり（協力隊、地域づくりインターン生、連携大学の学生）
・近隣の市町村との交流、交流を担っている団体（源流塾、達っちゃんクラブ）

●ないもの
・イベントがありすぎて余裕がない

４、インターンシップ事業に参加した感想

【川上村・あるもの探し】

私がインターンシップ事業に参加した動機の一つに、地域づくりの現場を知りたい、という気持ちです。川上村に来た初日に村長、副村長をはじめとする役場の方々にご挨拶した際、皆さんが特に強調された話題は「人口の減少」であり、「第三者目線で川上村に欠けている物を指摘してほしい」と言われたことが印象的でした。

私はインターンシップ期間中に「移住希望者の目線」で川上村での時間を過ごし、村の様々な側面を見させていただきました。報告書で提案として挙げた子供の遊び場のように、確かに欠けている物もありましたが、それ以上にたくさんの「魅力がある」ことも知りました。

村外から川上に移住した人に、川上村の魅力をお尋ねしたところ、このような答えが返ってきました。

「山が奥深いこと」
→自然が豊富で多様（原生林も残っている）
→昔ながらの文化がよく残っている。
ブラックボックスみたいに、自分の知らないことが沢山出てくる。

どちらも裏返せば、
「生活が不便」、「人が閉鎖的、新しいことをしにくい」

いずれも川上村の欠点として見ることもできますが、移住者にとっては欠点を補うだけの魅力があるということではないでしょうか。村づくりは「ないもの探し」ではなく、「あるもの探し」から始めるというお話を聞いたことがあります。

今回の報告書で「川上村にある物とない物」をリストアップしました。改めて書き出してみると、川上村の魅力は沢山あることが分かりました。川上村はこれから、村にある物のなかから守っていくべき魅力を、住民と村が一緒に決めて、「村の将来ビジョン」を作ることから始まるのではないかと思います。川上村の魅力の中で、一番好きな魅力は、豊かな自然と、豊かな人間関係です。川上村には、この二つは大切に守って行ってほしいと思います。

報告書には「川上村にない物」もリストアップしました。これは、私が思う「川上村に必要なもの」です。川上村にあるものと対立する項目もありますが、参考までに見ていただければと思います。

【川上村に定住してくれる人の探し方】

インターンシップ中に印象に残ったエピソードがあります。

吉野杉の割り箸製作所を見学させていただいた時のことです。この方は、製品を問屋に卸すだけではなく、自ら自社製品のファンを開拓していらっしゃるとのことですが、その方法は地道な商品の質・価格・製造能力の向上、市場調査、ダイレクトメールの送付です。

「ダイレクトメール 1,000 通送って、反応があるのは１軒だけ」
「それでも一度買ってくれたお客さんは、必ずリピートしてくれる」

移住者探しも同じなのかもしれません。

①他の市町村を調査し、川上村にある物を見つける。
②I ターン希望者が求めていることを調査し、川上村が持っている物の中で、I ターン希望者が求めている物を分析する
③I ターン希望者に向けて情報を発信する（し続ける）

日本全国に散らばっているＩターン希望者の中から、川上村という場所にマッチする人を探し当てることは容易ではないと思います。それでも、川上村に興味を持ってくれるＩターン希望者が「ここに住みたい!」と思えるような村づくりを続けることで、定住者は着々と増えていくのではないかと思います。

定住促進事業のお話を聞いている際に、移住しても定住をしてくれない方もいるというお話を聞き、移住者を探すことの難しさを実感しました。

しかし、この割り箸製作所の販売戦略の例のように、マーケティングの知識は村づくりにも応用できるのではないかとも思います。現在、インターンシップ中の企業で、人生で初めてマーケティングの勉強をしています。定住者を見つけることは難しいことですが、今、学べるだけのことを学び、これからの人生で使いこなせる知識にしたいと思います。